

永遠のアリア ~下巻~
The Spirit of Eternity Sword

The Spirit of Eternity Sword-3

Original Story ザウス

Novelization 三田村半月

Original Illustration 人丸



HARVEST
NOVELS

プロローグ 5

第1章 湖畔の契り 17

第2章 帝国の正体 57

第3章 エターナル 89

第4章 別離 119

第5章 時の迷宮 153

第6章 はじまりの地 187

エピローグ 220

プロローグ

一つの命が消滅しようとしていた。

黄金色の光が、洞窟の内部を照らしている。

小さく、儂い、蛍のような淡い輝きだった。

巨体が倒れた地響きも、苦悶の咆哮も途絶えた今、死の静寂が支配する広大な洞窟で、くちや…、くちや…、と美味そうに咀嚼する音が聞こえるばかりだった。

その少年は、うずくまっていた。

紺色のブレザーが返り血で汚れている。ほっそりとしているが、ひ弱な印象はない。鞭のようにしなやかで、強靱さを秘めた肉体だった。

屠ったばかりの獲物を貪っている。

頬張っているのは龍の肉だ。

すすっているのは龍の血だった。

甘美な味だった。

噛めば噛むほど、新鮮な唾液が湧いてくる。飲み込めば飲み込むほど、胃の腑が温まり、身体の隅々に熱がひろがっていく。細胞の一つ一つまでが活性化し、四肢に力がみなぎるようだった。

切れ長の双眸そうぼうが強い光を帯びている。

薄い唇のまわりは真っ赤だった。

あふれた液体が、ぼたり、ぼたり、と尖った顎先から滴したたる。長い前髪も血で濡れそぼり、べつとりと額に張りついていていた。すつきりと鼻筋が通り、繊細に整った顔立ちをしているだけに異様な光景だった。

——見かけ倒しだったな……なにが守護者だ。僕が一突きしただけで、あっけなく死んでしまうなんてね……。

くくっ、と少年は喉を鳴らした。

龍を殺した手応えを思い出したのだ。

奇妙な形の剣は、バターでも切るように、あっさりと装甲そうこうのような腹部を貫いた。気持ちよかった。射精感にも似た悦楽が身体を痺しびれさせた。陶酔しながら、何度も突きたて、何度もえぐった。

龍は、へ守護者アレタスと名乗った。

だが、どうでもいいことだった。

襲いかかってきたから、殺したまでだった。

「そうとも……僕の邪魔をするやつは、みんな殺してやればいいんだ……」

同意するように、龍の腹部に突き刺さっている剣が身震いする。牙を剥いた魔物が剣の

形をとつたような禍々しいフォルムだった。

刀身が不気味な緋色に輝いている。

生き物のように、びくっ、びくっ、と脈動している様は、果てのない射精を繰り返すペニスのようなだったが、逆に龍から生命力をすすっているのだ。

目覚めたときには、この洞窟にいた。

普通の世界であるはずがなかったが、もう違和感すら残っていない。最初に感じた混乱も、未知の怪物と対峙した恐怖も、この異形の剣を手にしていると気づいた瞬間に消え去っていた。

ついに姿を維持できなくなったのか、龍の巨体が拡散した。

黄色の光となって散り、それを異形の剣が貪欲に吸収した。

少年は、右手に剣を握んで立ち上がった。

柄の部分から、絶大な力が伝わってくる。握っているだけでも心が昂ってくる。気まぐれな性衝動を満たすため、彼の家に住えるメイドを犯したときにも感じたことのない、圧倒的な万能感と征服感があった。

夢でも、現実でも、どうでもよかった。とにかく、いい気持ちだった。生まれ変わったかのように、身も心も軽い。叫びたくなるほどの開放感があった。これほど爽快な気分になったのは、生まれて初めてのことだった。

「……ここは、どこだ？」

口元をぬぐいもせず、少年は呟いた。

洞窟から出るまでもなく、外の世界を視ることができた。これも異形の剣が与える能力なのだろう。神聖サーギオス帝国の最西端にある樹海。ミスレ遺跡東部の洞窟。そう剣が教えてくれた。

龍の言葉が理解できたことも、不思議には思わなかった。

この世界は、自分のために存在している。

そんな確信があった。

常識も、法律も、通じない。卑屈な教師も、愚鈍なクラスメイトも、目障りな警察も存在しないだろう。彼を苛立たせ、縛りつけようとするものは皆無だ。退屈はしなくてすみそうだった。

たった一つだけ、欠落感があることに気づいた。

「佳織……」

最愛の少女が、そばにいないのだ。

「僕の佳織は……どこにいるんだ？」

少年は、ふらりと洞窟から出ていった。

鬱蒼とした森がひろがっていた。

少年は、猫のように足音もなく歩いた。

暗い夜空に、鋭い三日月が浮かんでいる。

真つ赤に輝き、血を滴らせた刃のようだった。

湿気が多く、空気は冷たかったが、不快感はない。

人の気配を感じて、ふと立ち止まった。

「あぐう……うっ……ひ、ひいいっ」

すすり泣きだった。快樂の声ではない。絶望のうめき声だった。

樹海を拠点とする賊にでも捕まったのだろう。小柄な身体を裸に剥かれ、膝を限界までひろげられ、上からのしかかられている。荒くれ者の腰が、せわしなく動いて責めたてていた。

はやしたてるような、下卑た笑い声——。

暗闇だったが、八人、と数えることができた。

少女は輪姦されているようだった。

肉付きの薄い太腿が踊り、闇の中で白く映えている。猥褻な腰の動きにあわせ、ぶらん、ぶらん、と華奢なつま先が揺れる。いちおう止血をされているが、逃げられないよう臍を切られているようだった。

「う……うう……んぐっ」

苦痛に耐えて歯を食いしばり、おさまりの悪いロングヘアをふり乱している。

偶然、少女の顔が、少年のほうへむいた。

瞳が虚ろで、焦点があつていなかった。

——佳織っ。

ざわっ、と少年の髪が逆立った。

怒りのためだった。

「貴様らあああつ」

逆上した少年は、賊の一団へ突進していった。

予期せぬ襲撃を受け、賊たちは反撃することもできなかった。

それは戦闘ですらなかった。一方的な殺戮だ。悲鳴を放つ余裕すらなく、盗賊たちは次々と殺されていった。

時間にすれば、わずか数秒のことだった。

怒り狂った刃の嵐が通り過ぎたあとには、内臓をぶちまけた死体が累々と積み重なり、薪たきぎのような手足がいくつも転がっていた。

少年は、少女を抱き起こそうとして、端正な顔をしかめた。

「おまえ……誰だ？」



「あ、あう……」

よく見れば、少女は佳織ではなかった。
髪型と、大きな瞳が似ているだけだ。

「ふん……」

とたんに興味をなくしてしまった。

——佳織は、どこにいるんだ？

心の中で、少年は問いかけた。この世界が自分のためにあるのならば、当然、いっしょに彼女もきているはずだったからだ。

異形の剣は、ラキオスという小国にいと教えてくれた。

しかも、それだけではなく、あの忌々しい少年もいっしょだと剣は伝えてきた。

「悠人のやつが？ なぜだ？ なぜ、あいつなんかと……っ」

どす黒い怒りが腹腔を焼いた。

佳織は、自分といっしょにいるべきだった。

ここは、自分のための世界なのだから——。

それなのに、まったく生きる価値もない、軽蔑すべき塵ごみのような存在が、愛している少女のそばにいる。なんの力もないくせに、一人前の保護者気取りでまわりつき、支配しようとしているのだ。

我慢できることではなかった。

「殺してやる……殺してやるぞ、悠人おっ！」

少年は、狂おしいほど佳織を愛していた。

そして、悠人を激しく憎悪していた。

——そうだ！ へ求めを砕き、その契約者を殺すのだ！

血を吐くような激情の聲が、頭の中で轟いた。あらゆる負の感情が、荒々しく剣の柄から流れ込んでくる。直接脳に手をねじ込まれ、かき回されるようだった。頭を押さえ、少年はうずくまった。

映像が目蓋の裏で弾けた。

「ううっ」

それは、少年のものではない過去の記憶だった。

一つの古き王国が、終焉を迎えようとしていた。かつてへ大陸を統一していた聖ヨト王国が分裂したのだ。血を分け合った兄弟たちが憎しみあい、殺しあった——大量のマナが流れた佳き時代であった。

異形の剣は、異世界から召還されたエトランジェに握られている。へ誓いと呼ばれ、無力な人間たちから怖れられていた。

第一王子のもとで死と破壊をふりまき、別のエトランジェたちが持つへ空虚とへ因果

をへ大陸への西方へ追いやり、へ求めへとその契約者を北方へ封じた。

だが、最後の戦いで、へ求めへの使い手は、壮絶な死闘の末にへ誓いへが操るエトランジエを破った。へ求めへの使い手も重傷を負ってラキオスへと帰還した直後に謀殺されてしまったが、そのときの屈辱をへ誓いへは忘れていなかった。

今、へ求めへはラキオスにある。

新しい契約者の手に握られている。

砕かなければならない！

破壊されなくてはならない！

消滅させなければならぬ！

怒りで抑制を失った少年の精神は、たやすくへ誓いへの憎悪とシンクロしてしまった。

「佳織……必ず……この僕が救い出してやるっ！」

顔を上げ、そう高らかに宣言した。

そのとき――。

少年は、四方を囲まれていることに気づいた。

「……僕に用か？」

双眸から凄まじい赤光シロツクが放たれた。

魔物と一体化したような、禍々しい形相だった。

森の闇から、漆黒しつこくの鎧よろいで武装した兵士たちが姿をあらわした。

「おまえたちも、僕に殺されたいのか？」

不機嫌にへ誓いゝをかざすと、漆黒の兵士たちはおびえたように身を震わせ、いつせいにひざまずいた。

「お迎えに上がりました、エトランジエ殿——」

少年——秋月瞬あきつきしゅんは、帝国の客人まればととなったのだ。